

水原紫苑 自選五十首

光線をおんがくのごと聴き分くるけものか良夜眼とぢある

菜の花の黄溢れたりゆふぐれの素焼の壺に処女のからだに

興福寺少年阿修羅にかなしみを与へし仏師の背や広からむ

風狂ふ桜の森にさくら無く花の眠りのしづかなる秋

胸びれのはつか重たき秋の日や橋の上にて逢はな おとうと

飛ぶ鳥に刃なきことさびしとも美しともおもふ暮れぐれにして

球体に暫時宿りてあはれあはれ稚き神が毬をつくこゑ

殺してもしづかに堪ふる石たちの中へ中へと赤蜻蛉 ゆけ

宥されてわれは生みたし 硝子・貝・時計のやうに響きあふ子ら

「びあんか」



みずはら・しおん
「中部短歌」所属
「NHK歌壇」番組進行役

死者たちに窓は要らぬを夜の風と交はる卓の薔薇へ知らせよ

われらかつて魚なりし頃かたらひし藻の蔭に似るゆふぐれ来たる

まつぶさに眺めてかなし月こそは全き裸身と思ひいたりぬ

いにしへは鳥なりし空 胸あをく昼月つひに解らぬを抱く

このゆふべ城に近づく蜻蛉あり武者はをみなを知らざりしかば

足拍子ひたに踏みをり生きかはり死にかはりわれとなるものを踏む

春昼は大き盃 かたむきてわれひと共に流れいづるを

魚食めば魚の墓なるひとの身か手向くるごとくくちづけにけり

象来たる夜半とおもへや白萩の垂るるいづこも牙のほほす

「うたうら」

ほほゑみの飛鳥ほとけは一本のさやげるいのち狩りたまひけり

さくら食む鳥のあかるさ終はりなき書物を得たる少女のやうに

グラスよりグラスに移る一角の獣あり濡れぬその眼はや

夏帽子かぶらぬ君に降り来たる古鏡碎片なほもうつし世

かなしみに胸裂くることまことなれ鶴鴿一羽裂け目より翔つ

黄落のいちやうは吾子にあらざるをかがやき舞へばわが乳痛めり

うす青き卵の中の星辰をわが思ふなり鶏のさびしき

黎明はしづかなる牛目さむれば双角ふかく天にとどけり

白鳥はおのが白き墓ならむ空ゆく群れに生者死者あり

さくらさくら桜生みたる父母をわが父母といつかおもへる

父母の白萩われの白萩のあはひかそけき犬の白萩

すれちがふ風は元雅能果てて内耳のごとき廊下ありけり

くちづけの深さをおもひいづるとき雲雀よ雲雀そらを憎めよ

美しき駅を建てむと胸板の傾斜にふれつ 汽車知らぬイエス

死ぬるまで愛しあふ鳥 死を越えて愛しあふ鳥 白ふかきいづれ

こぼれたるミルクをしんとぬぐふとき天上天下花野なるべし

『客人(まらうど)』

樹の無力 空の無力のただなかに雲のやさしき手術台見ゆ

夏草を運べる貨車が過ぎゆきてわれらは駅のまなざしに生く

青年をするどく見つめ去りゆけり多神教なるあぢさゐの精

抱擁に閉ぢしまふたの暗がりに石切場見ゆ石の母見ゆ

青年子規・青年漱石 ゆふぐれの大河に入るを見しごとし 草として

夢野原無限にあらず角占めて立てる薔薇色のアテネフランセ

ロンドンにただ一日のみさまよひしあれちのぎくのごときわれかも

白露や過ぎにし鷹女銀河ゆきあはれうつくしきほと見するなり

夢のきみとうつつのきみが愛しあふはつなつまひるわれは虹の輪

きらきらと冬木伸びゆく夢にして太陽はひとり涙こぼしぬ

われのみにきこえぬ鐘にふれにしがふるへるたりき鳴りてるにしか

あしひきの山百合あゆみいづるかたかがやきるたり死者の学校

後の世は果実と言ひし友ありき狂へる鳥のわれはついはむ

病葉の直ぐなるこゑのさびしきは逃がれむかたなし恋の耳にて

一生に一度出逢はむうつくしき雲のかたちを血もてるがきぬ

はるかなる舞台のひとにパラソルをかざせり野辺もゆめならなくに

『新星十人』

未刊